第 2016-30 号

恵みと真理のニュース

2016 年 7 月の四次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］

救われた喜びを与えて下さり、人々にその喜びを伝え主の体である教会を仕える幸せな生活をするように導いてくださった神様に感謝と賛美を捧げます

私の家庭は朝ことに水を祭殿に捧げるほど偶像崇拝が酷かったです。 故郷の西マポは大きくて深い井戸があって村の人々が行き来して井戸水を汲んでました。また、テレビがなかなか無かった時代だったので唯一に私の家にがテレビあって人々がみんな集まって夜までテレビを見ながら様々な話しをしました。偶像崇拝をするのも良くないと思ったし、みんな集まって騒ぐのも個人的な生活に不便が多くて嫌でした。
そんな環境で子供の頃友達についてカトリックに通いミッションスクールの高校に進学してはじめてキリスト教を接してイエスキリストの神様を知るようになりました。聖書の通り神様を信じる信仰もなく平日はチャペル時間に礼拝を参席して週末には友達とカトリック教会に行く生活が続きました。学校を卒業をしてキリスト教に関連する会社に就職しました。そこでは毎週水曜日の午前に全職員が集まって礼拝を捧げました。その時
間には大変な仕事をしなくて礼拝が終わったらすぐおいしい昼ごはんを食べたので信仰も無くても楽しい心で礼拝に参席しました。篤実な信者だった社長は職員達が主日にも礼拝を捧げたのか確認しました。それで信仰がない職員達も半強制的に礼拝を捧げなければならなかったです。私も高校の時のように義務的で形式的に礼拝に参与しました。

結婚する時期になって今の妻と結婚しました。妻もイエス様を信じなかったです。ある日は妻が病気になったか苦しんでいました。病院に行って検査をしても何で痛いのかその原因と病名も知らないと言われました。他の病院に行っても同じでした。どんな病気でなぜ病気になったか治療する方法もなく、心だけ苦しかったです。妻の状態が悪化されるほど私の夫婦は日々血が渇くなる感じで心の苦労しました。
その時教会に通う職場の同期が教会に行って神様に切に祈ってみなさいと勧めました。藁にもすがる思いで今まで一回も教会に行ったこともない妻と職場の同期をついてはじめて行って心を尽くして礼拝をして妻の病気が治るように切ない心で祈りました。
説教はなれてない表現だったから理解も出来なくても心が平安になり賛美が耳に入り礼拝が終わった後賛美歌が心に長く残りました。何より妻が痛みを忘れて熱心に説教を聴き賛美をして祈りもしながら顔が明るくなり言葉では表現できないくらい喜びで充満になって私も嬉しかったです。その日、決心して礼拝を終わってから家に帰る道でこれから教会を熱心に通い心を尽くして神様に礼拝をささげ祈ると決心すると話しました。以後、礼拝を捧げる時に妻の顔は花が咲くように体に良い香りがするようでした。妻は一週間を断食祈りをして神様に切なく祈りました。普通の人々もできない断食ですが、妻は始めてする断食にも賛美し祈って一週間を耐えました。そして、一週間が過ぎて驚くな事が起きました。妻の顔に明るい照らして私が大丈夫なのかと聞いたらすぐ妻は“神様が治療してくださいました。神様が癒してくださいました。”と確信がある語調で言いました。私の夫婦はその場で神様に感謝の祈りを捧げ知っている賛美歌を選んで歌いました。“しかし、若菜を恐れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。あなたたちは牛舎の子牛のように躍り出て跳び回る。（マラキ書4：2）という御言葉のようになって楽しくひたすら主だけを信じ愛する信仰生活をするように強く決心しました。そして教会に行って妻の病をきれいに治療してくださった神様に感謝をしました。
決心したとおり神様を信じて支える生活をする中でアンヤン市に引越して恵と真理教会に礼拝を参席しました。説教に恵まれ聖霊の感動を受け私達の教会として仕えるようになりました。“そして信仰は実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。”（ロマの信徒への手紙）
恵と真理教会に通ってから私達の夫婦は信仰生活の御言葉の権能の働きが望まれ日々進んでいます。また真実で愛が多い区域長が教会生活に良く適応し教会の全ての礼拝と区域礼拝まで熱心に参席し信仰を育って礼拝中心で生きるように私達に様々で多くの助けを与えてくださいました。
礼拝だけ捧げた私が熱心に奉仕をする生活をしながら多様で豊かな祈りに答えられました。長路が奉仕するように私を導いてくださり、伝道室で奉仕し伝道することも楽しくなって神様に栄光を捧げるようになりました。熱心に礼拝中心、教会中心で誠実に信仰生活をする間神様は足りない私に恵を与えて下さり、執事から長路まで立たせてくださり、教会と聖徒を支え献身する神霊な楽しさを溢れるようにしてくださいました。
苦難を通してイエス様に出会い神様の権能を体験して深く神様を信頼して牧師を通して生きておられる神様の声を聞き信仰が深くなりました。また聖霊で満たされた教会を支えた理由も私達を愛した神様の摂理であり限りない神様の恵みでした。救われる喜びを感じるようにしてくださり、その喜びを人々に伝える人生で生きるようにしてくださった神様、主の名を褒めたたえます。礼拝の喜びとここカンジュ聖殿で主の体である教会と主の民になった聖徒を仕える楽しさをくださった神様に賛美と感謝を捧げます。

［信仰コラム］　言約に対する信仰と聖徒のかっこ良さ

＂信仰によって、サラもまた、年老いていたが、種を宿す力を与えられた。約束をなさったかたは真実であると、信じていたからである。...＂（ヘブライ書 11:11～12、17～22)

神様の言約に対する信仰が揺るがない境地に至った人は聖徒の身分に良く似合う＇かっこいい聖徒＇です。このような境地に到達するためには数多くの試みを経験して多くの練習をする過程が必要です。本文に登場する人物達はこのようなことに見事な手本です。
まず、サラについて記録された部分を調べてみます。本文の 11 節と 12 節に次のように記録されました。＂信仰によって、サラもまた、年老いていたが、種を宿す力を与えられた。約束をなさったかたは真実であると、信じていたからである。このようにして、ひとりの死んだと同様な人から、天の星のように、海べの数えがたい砂のように、おびただしい人が生れてきたのである。＂アブラハムの妻であるサラは若い時も孕むことができなかったが、90 歳になって息子を産みました。このような奇跡は神様の約束に対するサラの信仰によったことです。サラは神様が数多くの子孫を与えてくださると口約束なさったお言葉を信じました。そうして天の星と海辺の数えがたい砂のように多く生育しました。
栄えた子孫を与えてくださるという神様のお言葉を初めて聞いた時がアブラハムは 75 歳、サラは 65 歳でありました。彼らは信じて期待を持ちました。ところが、年月が絶ちながらますます信仰が冷めて後には神様が直接言われるお言葉を聞いてもとんでもない話に扱って笑ってしまいました。しかし、神様との直接的な対話を通じて明らかに悟るようになりました。疑いは消え確信が心に根付きました。神様が指示なさった通りにアブラムをアブラハムに、サライをサラに名前を変えて呼びました。信仰を持続させていくために神様のお言葉を聞いてまた聞いてください。現実の状況に基づいたことではなく神様の言約に根拠した信仰を持って無から有を呼び出してください。
次は、アブラハムについて記録された部分を調べてみます。
神様が試みるためにアブラハムを呼び一人子のイサクを連れてモリヤの地に行って神様が指示なさる山で捧げ物として捧げるように命令なさいました。神様が晴天霹靂（せいてんへきれき）のようなお言葉を言われたが、その間試みを受けて信仰が完全になっていたのでアブラハムは神様の抗議せずに直ちに行動として移しました。壇の上に置いたイサクに向いてアブラハムが刃物を執って殺そうとする時に神様が中断させて備えられた雄の羊を捧げ物として捧げるようになさいました。ヘブライ書の 11 章 17 節から 19 節に＂信仰によって、アブラハムは、試錬を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。＂と記録されています。神様のお言葉を信じたらそのお言葉をつかみいかなる状況になってもその信仰通りに考えて話し、行動すべきです。
最後に、イサクとヤコブ、ヨセフについて記録された部分を調べてみます。
ヘブライ書 11 章 20 節から 22 節に＂信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコブとエサウとを祝福した。信仰によって、ヤコブは死のまぎわに、ヨセフの子らをひとりびとり祝福し、そしてそのつえのかしらによりかかって礼拝した。信仰によって、ヨセフはその臨終に、イスラエルの子らの出て行くことを思い、自分の骨のことについてさしずした。＂と記録されています。神様の言約に根拠して祝福することは信仰の行為であります。聖徒のように行うかっこいい事であります。イサクとヤコブ、ヨセフは神様の口約束が自分の時代には叶われないとしてもいつかは必ず成就されることをみじんも疑いませんでした。
皆さんはイエスキリストの再臨と聖徒達の復活が必ず叶えられることを信じますか？ならば皆さんは信じる事実を他の人々に熱心を持って伝え、その日を待ちながら望みの中で楽しく生きることが聖徒のように行うことであります。皆さんは、サラ、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフのように神様の口約束を固く信じて無から有を呼び出すかっこ良さと約束のお言葉に基づいて祝福するかっこ良さを見せる聖徒になってください。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

肉体にとげをくださった理由

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

使徒パウロには非常に深刻な問題がありました。パウロはそれを “私の肉体にくださったとげ”と言いました。 このような表現だけではそれが正確にどんなことなのかを分かりにくいです。そしてさまざまな推測をするようになります。社会に進出して安定した職業と家庭を持って生活したい誘惑という見解があります。 パウロが直面するいろいろの反対と迫害を意味するという見解があります。 言語障害という見解があります。 眼疾とそれによる頭痛だと見る見解があります。しかし聖書にはパウロが言った“肉体にとげ　すなわちサタンの使者”に対して具体的な言及がないから何だと断定することができないです。 聖書にそれを明示しない理由があると見られます。 私たち各人にもパウロの肉体にあるとげに当たるその何があることができるしそれは人ごとに違うでしょうからです。 今日よく見ようと思うことはパウロの肉体にあったとげが正確に何やらかではないです。神様がパウロの肉体にとげをお許し願えた理由に対して使徒パウロが悟った内容です。

第一は、パウロは自分がとても驕慢で自ら偉そうな顔をしないようにするために神様が肉体にとげをくださったということを悟りました。

パウロは自慢心を持つに値する条件をたくさん持っていました。
第一は、パウロは肉体的な面で自慢する条件を持っていました。 パウロはユダヤ人が特権で思って誇るものなどを自分は皆　取り揃えているという事実を七種で並べました。 八日ぶりに割礼を受けました。 イスラエル族属でした。ベニャミン支派でした。 ベニャミン支派でイスラエル国の初代の王が排出されたしルホボアム治下で国が分裂された時ベニャミン支派はタビテ王朝に忠誠しました。 パウロはタソで生まれて育ったが　カマリヘ門下で学ぶためにエルサレムに行きました。 そして彼はヘブライ語が上手に話せるヒーブリ人の中のヒーブリ人でした。 彼はバリサイ人で教会を逼迫するほどに熱心でした。 パウロの師匠カマルリエルは徳望が高い律法学者でパウロがカマリヘ門弟というのは誰よりも律法において精通するということを意味します。
二番目は、パウロは神様の仕事のために献身した経歴と業績面で自慢する条件を持っていました。 パウロはコリント教会に送る手紙でこんなに記録しました。
“彼らはキリストの僕なのか。わたしは気が狂ったようになって言う、わたしは彼ら以上にそうである。苦労したことはもっと多く、投獄されたこともっと多く、むち打たれたことは、はるかにおびただしく、死に面したこともしばしばあった。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、そして、一昼夜、海の上を漂ったこともある。幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった。”（コリント人への第二の手紙，11:23～27).
三番目は、パウロは神霊な体験で自慢する条件を持っていました。 パウロはコリント人への第二の手紙 12 章にこんなに記録しました。
“わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた-それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。 この人が-それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである-　パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。”（コリント人への第二の手紙 12:1～5).
パウロは今までよく見たところのように驕慢に値する条件をたくさん持っていました。 パウロにある肉体にいらっしゃる驕慢を制御する装置の役目をしたのです。 パウロはこれを悟りました。 “そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。”（コリント人への第二の手紙，12:7)と言いました。

二番目は、パウロは肉体にあるとげが自分から去るように神様に切に求めている途中彼に神様の恵みが充分であるということを悟りました。

パウロには肉体にあるとげがとても深刻な問題でした。 そしてこれを去らせてくださると神様に三度も切に求めました。 ところでパウロの懇求に対する神様の回答は “私の恵みがあなたに充分である。” というお話でした。 これは“ありがたい拒絶”です。 私たちにくださる神様の恵みはとげを包容するのに十分であるだけ豊かです。 神様がくださる充分な恵みの中にはイエスキリストでよって注がれる神様の愛があります。 聖徒に対する神様の愛は私たちにすべての難しさを十分に勝たせる恵みになります。 ローマ人への手紙，8 章にこんなに記録されました。 “だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。「わたしたちはあなたのために終日、死に定められており、ほふられる羊のように見られている」と書いてあるとおりである。しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、 高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。”（ローマ人への手紙，8:35～39). 私たちにある問題がいくら大変で苦しいと言っても神様がイエスキリストによって私たちに下さる恵みとして充分に手におえることができます。

三番目は、パウロは肉体にあるとげによって自分の弱さを認識して神様に深く寄り掛かれば神様の能力が自分にとどまるようになって自分を通じて現われるということを悟りました。

使徒パウロには肉体にあるとげが彼を速かに教育訓練させました。 “ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。”（コリント人への第二の手紙 12:9)で告白しました。 人は経済的難しによる苦難、疾病による苦難、人間関係による苦難、意志が挫折されるによった苦難、精神的な苦悩による苦難などによって自分の弱さを認識するようになります。 この時神様の能力が私の中に泊まらせるためには神様を向けて私たちを留守にしておかなければなりません。 神様の前で自分の弱さを認識するのが自分を空けて置く仕事です。自分の　弱さと不足と困難を返って嬉しく思って神様の助けを切に望んで頼るのが自分を空けて置く仕事です。 自分の都合をうらまないで返って神様の大きい恵みを思って感謝するのが自分を空けて置く仕事です。
問題と苦難のとげによって自分の弱さが分かって神様の能力を切に望んだら、問題と苦難のとげによって神様を深く頼るようになったら、問題と苦難のとげによって神様の大きい恵みを思ったら問題と苦難のとげが自慢になるでしょう。使徒パウロはこのような事実を悟って言うのを“だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。”（コリント人への第二の手紙 12:10）としました。 実はパウロは肉体にとげがあるにもかかわらず神様の権能で地中海を取り囲んだ広大な地域に福音を伝えて教会を設立したし動き手を養成しました。自分の弱さが分からなければ神様の能力に対しては無知になります。 自分の知識と能力と自信感のため神様の能力に対する渇望もなくて神様の助けを寄り掛かる心もない人はむしろ不幸な人です。

パウロに除去されないとげがあったように私たちにもそのような問題があるでしょう。 時時にはまっすぐに除去されるとげもあって長期間立ち去らないとげもあるでしょう。 またこの世を去る日まで除去されないとげもあるでしょう。 とにかくそのすべてのとげが自らを謙遜にさせることにいいようにしてください。 そのすべてのとげが神様の恵みが充分であるという事実を悟らせることにいいようにしてください。 そのすべてのとげが自分の 無気力が分からせてイエスキリストの能力が私の中に泊まらせることがいいようにしてください。 ”ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。 そんなにして だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。” と言えるように願いします。